

小笠原 信之著

# ペンの自由を貫いて

伝説の記者・須田禎一

## ペンの自由を貫いて

伝説の記者・須田禎一  
小笠原信之著



＜新聞が死んだ＞  
60年安保から半世紀！  
どう乗り越えるか？

46判・303頁・2625円  
緑風出版  
978-4-8461-0913-4

話を戻そう。いったんは決別したはずの朝日から推される形で、道新に籍を移し、須田が新聞人として再出発したのは運命としか言いようがない。故郷の女学校教員で終わる人物でなかった。

「戦時体制に不本意な時代」であったと言われる昭和を生き抜いた新聞人の生き様

新年早々の新聞各紙は「一から何十年」という記事を掲載するのが恒例だ。「温故知新」ならぬ「温故創新」に古きを温めて新しきを創造する」と掲げた『東京新聞』元日号に限らず、二〇一〇年は安保改定から五十年の節目である。

一九六〇年、岸信介内閣における口米安全保障条約改定に反対する運動は日本国中を騒乱の渦に巻き込んだ。著者は伝説の新聞人、須田禎一の生涯を描きつつ、「新聞が死んだ」と言われる六〇年代からまさに半世紀のジャーナリズムの衰退に強い問題意識を投げかけている。

東大女子学生の死により、一夜にして「暴力を排し議会主義を守れ」と変貌した在京七社の共同宣言は、その後地方紙四十一紙に掲載された。これに加わらなかつた『北海道新聞』（道新）の須田は「卓上四季」で新聞ジャーナリズムの反転を痛烈に批判し、全面講和を主張したのである。

新聞人・須田禎一（一九〇九―七三）を最も具現化したこの出来事は、反骨のジャーナリストとして知られる桐生悠々が「いま、言わねばならぬ」と言っているのがジャーナリズムの証左としたことに共通するのではないか。

本書はその彼を丁寧に追っている。昭和天皇にとっ

## 昭和を生き抜いた新聞人の生き様

半世紀のジャーナリズムの衰退  
に強い問題意識を投げかける

鈴木 雄 雅

者に職を求めたのは至極当然だったと思える。朝日新聞記者として中国大陸にわたった須田は、霞ヶ浦で村長、町長、県議を務めた家系の出身である。いわば、いいとこの長男坊や。国内の矛盾を解決する糸口として、国家が国家をもつて他国を侵略する様を見たら彼は、「加害者としての意識が不足していたから、ずるするべったり被害者になってしまった」（第2章ジャーナリストに）という。それが戦後どのように彼に影響したかは本書からうかがい知ることが出来る。

須田が戦後の一時期、教職に就いている（第3章）。新聞記者―教師、この道筋は興味深い。筆者が勤務する大学に新聞学科を設けた小野秀雄の目指す一つでもあったからだ。新聞学を修めた者がジャーナリストになるのはもちろんだが、教師という道もある。今となつては小野の真意は分からないが、巨々の仕事（ジャーナリズム活動、教育活動）が未来を育むという共通点を持つと信じていたのでは

ないか。話を戻そう。いったんは決別したはずの朝日から推される形で、道新に籍を移し、須田が新聞人として再出発したのは運命としか言いようがない。故郷の女学校教員で終わる人物でなかった。

そして、須田ジャーナリズムが開花する（第4章政治・外交の社説を書く）。彼がああ安保騒乱の中で言わんとしたことは、実は「返塵のゆきつへ」ところは、一切の思考を停止して大勢順応に徹してしまう。そんなったら希望はない」（二二―四一―二五頁、一九六四年一月成人の口に寄せて）、だから若者は希望を持って、そのためには現実との格闘がある。

著者は須田の生き方を「人間主義ジャーナリズム」と称している（二八〇頁）。ジャーナリズムは人間のものを描く。当たり前だが、現代ジャーナリズムで忘れがちなことであるかもしれない。（すずき・ゆうが氏「上智大学文学部教授・新聞学専攻」）

★おがさわら・のぶゆき氏はフリージャーナリスト。北海道大卒。著書に「医療現場は今」「アインシュタイン読本」「麻のなかの民主主義ほか。一九四七（昭和22）年生。

(No. 2828 p.6)

週刊誌老人 2010/3/5